

経管栄養患者の身体拘束解除方法の検討～複数の代替方法を用いて～

独立行政法人国立病院機構七尾病院

田本奈津恵¹⁾ 寺井智佳子¹⁾ 河原彩¹⁾ 橋本陽子¹⁾ 山本吏¹⁾ 重野かおる¹⁾ 安井正英²⁾
看護部¹⁾ 呼吸器内科²⁾

要約

【目的】経管栄養患者の身体拘束解除のための代替方法の有用性を検討する。【方法】対象は、経管栄養患者で身体拘束（抑制ミトン型）を実施している患者 10 名。ベッドサイドで拘束解除のカンファレンスを行いながら代替方法を模索し新たな複数の代替方法がないか検討し、実践した。【結果】8 名が完全解除、2 名が一時解除となった。代替方法は 8 つ、代替方法の実践数は平均で 3 つ以上であった（表 1）。代替方法の組みあわせは、ベッドサイドでの見守りが最も多く、次いでチューブ管理方法、チューブ類の固定方法が多かった（表 2）。【結論】複数の代替方法を用いることで代替方法の安全性が高まり、有用であった。一方で一時解除の 2 名は、胃管チューブの自己抜去があり完全解除には至らず、今後の課題である。

表 1 対象者の概要と身体拘束解除の有無

	年齢（代）	性別	疾患	代替方法	
A氏	60	男	蘇生後脳症	1・2・3・4・6・8	解除
B氏	80	女	パーキンソン病	1・2・3・4	〃
C氏	80	女	心不全	1・2・3・4	〃
D氏	80	女	パーキンソン病	1・3・7	〃
E氏	80	女	肺結核	1・2・5	〃
F氏	70	女	小脳梗塞	1・2・4	〃
G氏	80	男	パーキンソン病	1・5	〃
H氏	80	男	肺結核	1・3	〃
I氏	70	男	脳出血	1・2・3	一時解除
J氏	80	男	パーキンソン病	1・4	一時解除

表 2 代替方法（具体策）と実践数 利用数（複数回答可）

代替方法（具体策）	実践数	利用数（複数回答可）
1 ベッドサイドでの見守り	・解除中ベッドサイドで付き添う ・反応を観察する	10
2 チューブ管理	（胃管チューブの場合） ・ヘアバンドを用いてチューブを保管 ・胃管チューブを輪ゴムでまとめる ・〃 手の届かない位置に置く ・〃 の先端を枕下に差し込み安定させる （胃瘻チューブの場合） ・チューブをボタン式へ変更 ・巾着・タオルを用いてチューブを収納	— 1 4 2
3 チューブ固定	・チューブと皮膚が密着するよう隙間がない固定 ・粘着力の強いテープを使用 ・胃瘻チューブを腹部に固定	1 4 1
4 体位の工夫	・クッションを用いたポジショニング ・拘縮・麻痺による可動域に合わせた物品の選択（タオル・クッション）	2 4
5 栄養時間の短縮	（胃瘻の場合） ・トロミ剤・栄養種類の検討 ・栄養時間・回数の検討	2 —
6 病衣の工夫	・上着をズボンに入れる ・バスタオル等使用して腹帯とする	1 1
7 身体的ニーズの対応	・かゆみの対応	1
8 ベッド周辺の医療機器の位置	・ルートが視界に入らないよう調整（栄養ボトル・経腸ポンプ）	1

※ —：該当なし